

酒場で出逢いの祝杯を上げるマーニャとミネア、そしてディル。
ディルにとって、初めての^{エール}麦酒。そして

「ディル あんたのつらさを半分、あたしたちに分けてくれるつもりで構わない。
教えてちょうだい、あんたのつらさを」
「思いついた事は何でも話します。 どんなにつらくても、話します」

マーニャとミネアの過去 父の仇バルザック、^{きんたつ}篡奪者キングレオ。
ディルの過去 あの村のこと、地獄の帝王エスターク。

三人の過去が、三人の思い出が、静かに交わる。

「偉いよディル。良くそんなつらい事を話してくれたね 偉いよ」

しかし
その時、ディルには既に、最大の危機が忍び寄っていた！

「あの 私 置き去りですか ?」

ドラゴンクエスト4 移植記念二次創作小説

「私の中の炎」

～エニックス「ドラゴンクエスト4・導かれし者たち」第5章より～

第4話 「見えたかい？ あたしの中の炎」

あさづけ兄貴

ひとり、ぼつんと、残されたディル。

不安でないといえば嘘になる。
しかし、彼女は、マーニャとミネアを信じ、ここで待つことにした。
「すぐ帰ってくるって 言ってたもんね」

きよろきよろと、辺りを見回す。

ほとんどの席が、がら空きだった。

入ってくる時、妙に「空気がいい」と感じたのは、酒を飲み、タバコを吸う人がほとんどいなかったからなんだ　ディルは、そう思った。

皿の上の腸詰め^{ソーセージ}をひとつ、フォークで刺す。

少し冷めたそれを、ディルは口に運んだ。

ぷつと弾ける歯触りを楽しんだ後、グラスの中の麦酒^{ビール}を流し込む。

「あ　結構美味しいかも」

齢17にして、麦酒^{ビール}と腸詰め^{ソーセージ}の黄金のコンビネーションの虜になるディルであった。
彼女の背後に、危機が静かに忍び寄っていることも知らず　。

*

ぼんぼん。

後ろから、ディルの肩を叩くものがあった。

「あ、お帰りな　」

振り向いたディルは、そこまで言って、固まった。

そこにいたのは　ディルの肩を叩いたのは、マーニャでも、ミネアでもなかった。
男、だった。

この店の主人^{マスター}ではない。

革ジャンを着て、金髪をすべて逆立てた、三白眼の、唇の薄い、軽薄そうな男だった。

男は、唇を歪め、下品な笑みを浮かべて、言った。

「お嬢ちゃぁん。俺たちとイイことしないかぁい？」

*

「まったくもう　何考えてるのよ、姉さんったら　」

カジノへの階段を、小走りで駆け下りるミネア。

「こんな時にカジノだなんて　」

階段を降り切り、カジノに踏み入ろうとした、その時
横から、声がした。

「おっ、早かったじゃない」

「えっ？」

ミネアが横を向くと、そこには
壁に寄り掛かり、腕を組んで、マーニャが立っていた。
軽く右手を上げ、ウインクする。

「いよう！」

*

「ひっ　　」

引きつった表情で、ディルが後ずさり　　しようとするが、椅子に座ったまま振り向い
た状態であったので、当然、背中がテーブルにぶつかる。

背中がぶつかったディルが、後ろ、つまりテーブルの方を向く。
すると、そこに

更にふたつ、見知らぬ顔があった。

男がふたり、それぞれマーニャとミネアが座っていた席に座っていたのだ。

一人は、赤いモヒカン刈りに丸いサングラス。

両耳や小鼻やら唇やら、いたるところに、ピアスがついていた。

舌を出し、「ひゃっひゃっひゃっひゃっ」と、笑っていた。

舌にもピアスがついていた。

その横に、もうひとり。

毛糸の帽子をかぶった、小柄だが、がっしりした体格の男であった。

鼻から下全体が、ヒゲで被われていた。

歯をむき出し、「ぐっふいふいふいふいふいふ」と、笑っていた。

ヒゲの黒と歯の白が、対照的だった。

「あ　　あ　　」

ディルは、驚きのあまり、言葉を発する事ができなかった。

*

「いよう！ じゃないわよ！」

ミネアがさすがに厳しい口調で言う。

「どういうつもり？ こんな時にカジノなんて！」

「カジノに行こう、なんてこれっぽっちも思ってないよ、あたし」

「え？」

本気で意表を突かれたような声。

「目的地はここ。すぐ上に登れて、上からは死角になる、この場所」

「？」

「わかんない？ あたしがなぜここに来たのか」

「分からないわ」

予想外の事態で混乱しかけた頭を静めようと、努めて冷静に、ミネアが言った。

「そっか。あ、もしかして、『あいつら』のことが見えてなかった？」

「あいつら？」

「そう。ちょうどあんたの後ろ 部屋の端のほうの席に座ってた、目つきのやば~い
三人組」

ミネアは、一瞬、ばつの悪そうな顔をした。

「ごめん、見えてなかったわ。ちょうど死角だったみたい」

「そんじゃ、しゃあないか。あんたにしちゃ珍しく鈍いな、と思ったんだけどね」

ほんの少しため息をついてから、マーニャは続けた。

「今 酒場、妙にがら空きだと思わない？ 普通なら賑わう時間だつてのに」

ミネアは、ちょっと驚いた顔をして うなずいた。

「それは、私も少し妙だと思っていたわ」

「その原因は、その三人組なんだよ。ほぼ間違いなくね」

「えっ!？」

「さっき、マスターに目で訊いてみたのさ。『あいつら、ヤバそうだけど大丈夫なの?』
って。そしたらマスター、首振って、ガラガラの席を見つめてため息ひとつさ」

マーニャがさっき、酒場の主人と交わっていたアイコンタクト ^{マスター}それが、これだったのだ。

「つまり、マスターが言ってるのは 」
「そう、あいつらのせいで、客が寄りつかない、ってこと。きっと、酒吞んで暴れるんじゃないのかい。はは」
マーニャは軽く笑った。が、ミネアの顔は和まない。
「でも、それと、姉さんがここにいることと、どういう関係が 」
「そう、そこが問題 でも、それは多分、あんたが一番よく知ってるんじゃない？」
「私が？」

*

二人の男の顔の前に 後ろからテーブルの横に移動した金髪の男が、ぬっ、と顔を出した。

ディルと男、その顔と顔が接近する。
ディルの至近距離で、男は言った。

「俺はよお お嬢ちゃんみたいな へへ 可愛～～い女の子と、お知り合いになりたかったんだよお へへへへ 」

そして、酒臭い息を、はあ～っ、と、ディルに吹きかけた。

ディルが、顔をしかめる。

ミネアと、そしてマーニャと こうして顔を近づけた時の、あの胸がドキッとする感覚。同性のディルですら憧れる美しさ。

そんな憧れを、そんなときめきを ディルは、この男からは、全く感じなかった。
感じるのはただひとつ、嫌悪でしかなかった。

ミネアの髪から薫る、花のような柔らかな香り。マーニャが身にまとっている、今ディル自身がまとっているのと同じ、香水の甘い香り。

そんなものは、この男からは、全く感じなかった。

感じるのは、タバコとアルコールが混ざった不快な臭気 ディルが先刻「空気が悪い」と言った、その空気を極限まで濃縮したような、そんな臭いでしかなかった。

ディルは、我慢できずに席を立とうとした。

が、その時

その男が、ディルの手を、がっちりとつかんだ。

「！」

「へへへへ　どこ行こうってんだあい、お嬢ちゃあん？」

*

「あんた、さっき、ディルの身に近い将来トラブルが起こる、って　そう言ったね」

「　ええ」

「あの三人組　さっきからこっちをじろじろ見てたんだよ。そのくせ、あたしが
そっちを見ると、目を逸らしてさ」

「！」

マーニャの一言をきっかけに　ミネアの中で、全てがまとまった。

他の客が全員帰るほどヤバい三人組。

突然席を離れたマーニャ、そしてミネア。

すぐに自分の席に戻れる、この場所。

ディルにトラブルが起こる、という占い。

三人組は、自分たちを狙っていた　しかし、彼らの獲物^{ターゲット}はマーニャではない。

今、酒場にいるのは　？

「ディルが！　ディルが危ないわ！」

焦るミネアに、マーニャが余裕たっぷりに言った。

「そう、そろそろトラブルを起こしている頃だろうね　あたしにも予想できるような
トラブルを」

「えっ？」

話が飲み込めないミネアに、マーニャは真剣な面持ちになって、言った。

「あんたの占いは当たる　本当に、憎いほどよく当たるんだ。あんたが『トラブルが
起こる』って言うからには、絶対起こるんだろうさ」

「　　」

「ずっとあたしたちがディルに張りついてれば、普通のトラブルはまず起こらない。けど、あんたが言うんだから、『トラブル』自体はきっと起こる　だとすれば、起こるのはよっぽど普通じゃないトラブルさ」

「　それじゃあ」

「普通じゃないトラブルなんて、あたしたちにだって、防げるかどうか分かったもんじゃないじゃん？」

そう言って、ウインクする。

「あ　　」

マーニャは、敢えて自分（とミネア）をディルから引き離すことで、三人組が『ごく普通に』ディルを襲うように　『ごく普通のトラブル』が起きるよう、仕向けたのだ。それならば、マーニャたちでも十分予想できるし、十分対処できるからである。

「分かった？ 分かったらとつとディルを助けに行くよ！」

階段を駆け登り始めたマーニャに合わせて走りながら、ミネアは苦笑した。

「　今日ほど、姉さんの悪知恵が憎らしいと思ったことはないわ」

「もっと言って言って！ 最高の誉め言葉だし！」

「私がディルだったら、2～3発ひっぱたいてるわよ。私をおとりに罠にするなんて！ って」

＊

ディルの手を握ったまま、男は言った。

「いけねえなあ、お嬢ちゃん。まさか、俺達から逃げようなんて　思っていないよなあ？
へっへっへっへ　　」

いつの間にか、モヒカンの男とヒゲ面の男が、視界から消えていた。

と同時に、ディルは背後に、二人の男の気配を感じた。

たとえ金髪の男の手を振りほどいて逃げたとしても、二人がディルを捕まえるであろうことは、明白であった。

ディルの退路は、封じられたのだ。

「あ　あの　あの　　」

怖い。怖い。怖い。

涙がこぼれる。

歯の根がガタガタ鳴る。

「これから、お嬢ちゃんを俺らのねぐらに招待してやるぜえ。そこで朝まで、こ～んなことやあ～んなことをして過ごすんだなあ、俺らはよ　　へへへっ」

叫びたい。叫びたい。

しかし、恐怖で身体が動かない。

凍ってしまったようだった。

「あ　　あ　　」

声が出ない。

「そうかい、嬉しいかい。そうかいそうかい、へへへ　　そう、そうやっておとなしくしてるんだな。まあどうせ、騒いでも何も出来やしないけどな」

何も出来ないの？

私には、何も出来ないの？

目をきつく閉じ、がたがた震えながら、ただ　　願った。

助けて！

助けて、マーニャさん！ ミネアさん！

＊

その時である。

「つ、冷てえっ!？」

あの男の声だった。

声と同時に、その手がディルの手から離れる。

そして、ふわりと、薫ってきた　　あの香り。

「えっ？」

ディルが、恐る恐る、目を開ける。

彼女の目に入ったのは、啞然とした表情で、頭から^{エール}麦酒を浴びてずぶ濡れになっている金髪の男だった。

その頭上には、逆さまになったコップ。口から^{エール}麦酒の滴が垂れている。
そして、そのコップを持っているのは！

「マーニャさん！」

マーニャが、逆さまのコップを手に、男を見下ろすように、その背後に立っていたのだ。
険しい眼光。

その眼光のまま、イヤミな口調で、マーニャは言った。
「あ～ら、ごめんなさいね。手がすべっちゃった」

ディルの顔が、ぱっと明るく輝く。

と、その時、今まで男に握られていた手を、誰かが、再び握った。
「えっ？」

さっきの男とは違う　柔らかく、温かい手。

後ろを振り向く。
天使の微笑みが、そこにあった。

「大丈夫？ 何か変なことされなかった？」
「ミネアさん！」

＊

「な、なんだあ、てめえ！」
金髪の男が立ち上がり、マーニャと対峙する。
ディルからはかなりの長身に見えた男だったが、逆立った髪を除くと、目の高さはマーニャとほぼ同じ程度だった。

「はん、『なんだ』だって？　　ずいぶんにご挨拶だねえ」

マーニャは、鼻で笑って、言い返した。

「あたしの連れにむりやり手え出そうとしたくせに。あんたらこそ何なのさ」

男は、一瞬怯んだものの、マーニャの問いに、再び下品な笑みを浮かべ、答えた。

「俺らか？　　へっへっへ、聞いて驚くなよ　俺らはな、エンドールゴッドファーザーの「顔役」、
ドン・ジョバンニ様の子分よ。なあ、お前ら？」

ディルの後ろに立っていたはずの他の二人に呼びかける男。どうやら、この男が三人のリーダー格であったようだ。

が

「おい、お前ら、どうした？」

男の見た方向には、本来立っているべき二人の姿がなかった。

その代わりに、そこにいたのは、これは前からいる小さな少女、そして オレンジ色の服を着た女性　ミネアだった。

そして、その傍らに、金髪の男に返事するはずの二人が、だらしなく倒れていた。

「！ て、てめえ！ 何かしやがったな！」

ミネアに怒鳴る金髪の男。

しかしミネアは、わざとらしく肩をすくめて、平然と答えた。

「さあ？ 寝てるみたいよ、この人たち。大方、酔いつぶれたんじゃないかしら？」

よく見ると確かに、彼らは規則的に呼吸しており、いびきすらかいているようだった。

「ちっ、使えねえ野郎共だ　　」

どうやら、この愚かな金髪の男は、ミネアの言葉をそのまま信じたらしい。もちろん、彼女が二人を<眠りの呪文>で眠らせた、などという考えには、及びもしない。

マーニャのほうを向き直り、再び得意げにまくしたてる。

「と、とにかくだ　俺らはかのドン・ジョバンニ様の子分。俺らに逆らうってことは、
ドン・ジョバンニ様に逆らうってことになるんだぜえ。へへへへ」

*

ドン・ジョバンニ。

それは、エンドールに住む者なら知らぬ者のない名である。

職業、^{ギャングスター}暴力団「ドン・ジョバンニ^{ファミリー}一家」代表。

この街の裏の覇権を握る、強力無比なギャングファミリー　その大親分であった。

数百人に及ぶ^{サンズ}子分を従え、他地域の^{ギャングスター}暴力団からの干渉を一切はねのけてきた侠客

弱きを助け、強きをくじく人となり。その一方、一家の誇りを汚す者や裏切り者には容赦しない　という、もっばらの噂であった。

であるから、この名は、エンドール市内では、恐怖と畏敬の念とともに知れ渡っていた。この名を出せば、市民はみな、恐れ、ひれ伏すのである。

しかし。

残念ながら、偉大なる^{ゴッドファーザー}大親分が率いる、誇り高き^{ファミリー}一家の中にも、箸にも棒にもかからぬような者はいる。

ドン・ジョバンニの名を利用するだけ利用し、弱い庶民を泣かせ、自分たちが甘い汁を吸うことだけを、生きがいとする者。

目の前の金髪の男も、まさにそういった者のひとりだったのである。

だから彼は、いつものように、マーニャを恫喝するために、恐るべきドン・ジョバンニの名を出したのだ。

それで、全てがうまくいくはずだった。そして、実際うまくいっていた。

ただし、それは、昨日までの話だった。

彼の目の前の、この褐色の肌の女性は、その名を聞いても顔色ひとつ変えずに、事もあろうに、こう言い放ったのである。

「ふーん　。で？」

「な　な、な、何い？」

男は本気で驚いた。ドンの名を出して、こんな反応を返す人間がいるとは思わなかったからである。

「お前、分かってるのか？ 俺はドン・ジョバンニの子分だと、そう言ってるんだぞ！」

「それはさっき聞いたよ　で？」

「こ、怖くねえのか？ ビビンねえのか？ ドン・ジョバンニだぞドン・ジョバンニ！」

俺に逆らうってことは　」

「うるさい！」

マーニャが、男を一喝した！

「あんたのバックなんか興味ないんだ。あんたの事を聞いてるんだよ、あたしは！」
男の額に、びしっ！と人差し指を突きつけ　マーニャは言った。そして、嘲笑うように

「それとも何かい？ あんた、そのドン何ちゃらの子分であること以外には、何の
とりえもない男なのかい？ はは～ん、きっとそうなんだね」

「な、な、な　　」

男の顔が、みるみる赤くなる。

「マーニャさん、すごい　　」

ディルは、ぼそっと呟いていた。

「いいかい」

男の額を指差したまま、マーニャは言った。

眼光が、鋭さを増す。

「あたしには、コーミズのマーニャって名前がある。父さんがつけてくれたその名前を
背負って　何をする時だって、その名前の下で、自分自身に拠って生きてる
つもりさ」

「　　？」

「だから、何か悪いことが起こってもあたしのせい。その代わりに、何かいい事が
あってもあたしのおかげ」

「　　何、訳分かんないこと言ってやがる」

「訳分かんないかい？ そうかい、あたしの話が訳分かんないか　　ははっ」

マーニャは、ほんの少し、声をあげて笑った。

「そりゃそうだろうね　　あんたは人の名前の下で生きてるんだもんね」

「何っ？」

「そのドン何ちゃらの名前さえ出せば、何でも出来ると思っている　　そうだろう？」

「ぐっ　　」

「あたしに言わせればね、そんなもん、生きてるうちに入らないね。ドン何ちゃらの
名前がなければ何もできない、ドン何ちゃらの子分であることに以外に何も無い
逆に言えば、ドン何ちゃらの子分でさえあれば、あんたじゃなくてもいいんだもんね。
あんたには『子分』であることしか、存在している意味がないんだよ」

にやり、と笑う。

「違うかい？」

「て、てめえ いい加減にしねえと 」

「いい加減にしないと何？ そのドン何ちゃら様が、あたしをいじめに来るのかい？」

「何い？」

ばんっ！

「なめんじゃないよ、チンピラ！」

マーニャが、テーブルを思い切り叩いた。

「ひっ!？」

「わっ！」

固唾を呑んで見ていたディルも、思わず、驚きの声をあげる。

「そんな脅しが、あたしに通用するとでも思ってるのかい！」

再び、男の額を撃ち抜くかのように、人差し指を伸ばす。

「女の子泣かせて、人の名前だけで生きてる そんなクズみたいな野郎が、この
マーニャさんを脅そうだって？ ハッ、とんだお笑い草だね！」

わざと、笑って見せる。

「上等じゃないの。そのドン何ちゃらさんを連れてきてごらんよ。あたしが相手に
なってあげる」

「！」

男が目を、かつ、と見開いた。

「な、な、な 」

「言ってるだろ、あたしはあたしに拠って生きてるって 親分さんとやり合えて
死ねれば、それもあたし自身の選択 本望ってもんだろうさ」

男の額から、冷や汗が流れ落ちる。

「て、てめえ 自分で言ってることが分かってるのかっ ？」

「分かってるさ」

男の額を指差したまま、艶然と笑うマーニャ。

「そのドン何ちゃらに逆らう人間がいる、つてのが、あんたには信じられないんだろ？
あんたには出来ないんだろ？

強い者の威を借りて生きる だから、強い者には逆らえない。そして弱い者を
泣かす 。小さいねえ、本当に小さいやつだよあんたは。クズだよ」

男は、本能的に、マーニャに「恐怖」を感じた。

目前の女は、自分の知るルールの外で生きている。そして、自分も無意識に感じ、敢えて無視しようとしている欠点 「人の力にのみ全面的に頼って生きている」ことを、臆面もなく、ずばり指摘した。

彼の無意識が、マーニャの存在を拒絶しようとした さもなくば、彼自身のアイデンティティが、無残に崩壊してしまうからだった。

「くそ、くそ くそお！ このアマ、殺してやる！」

男の手が、着ていた革ジャンの懐に入る。

「へえ、何をしようってんだい？ その懐から、ナイフでも抜こうってのかい？」

「くっ」

男が、マーニャの言葉通り、ナイフを握った手を懐から出した。

「こ、こ、こいつで ブスリと行くぞ！ し、し、し、死んじまうぞ！」

「 マーニャさんが！」

ナイフの刃の煌めきを見たディルが、ミネアを見やる。

しかし、ミネアは、いつもの微笑みを浮かべて、言った。

「大丈夫よ」

「でも」

「心配はいらないわ。姉さんがあんなやつにやられるはずがないもの」

「面白いじゃない。やってごらんよ」

マーニャが目を細め、その口元に笑みが浮かぶ。

「ただし、そいつがあたしの心臓をかき切る前に、あんたの頭が丸焦げになるけど

それでもいいんだね？」

「な、何？」

と、男が答えた、その次の瞬間 彼は、額の中心部に、妙な感覚を覚えた。

熱い、のだ。

「な、なんだ ?」

額に突きつけられたマーニャの指が、ものすごい熱を発しているように、男には感じられた。

そして、事実、そうだったのだ。

今マーニャがやったのは、メラ すなわち最も下級の火の玉の呪文の「応用」である。本来ならば前方に飛ぶメラの火の玉を、敢えて飛ばさず、指先に留めておく。ある程度修行すれば、これぐらいは簡単にできるようになる。

だが、今回のように、それを心理的駆け引きに使うというのは、恐らく、マーニャの他に思いつく者はいないであろう。

男の眉間から、薄い煙が上がる。

「ん この匂い？」

何かの焦げたような匂いが、ディルの鼻をついた。

「な、なんだ、これ」

「熱いかい？」

「て、て、てめえっ」

「あたしの炎 燃えて、辺りを照らし、敵を焼き尽くす これがあたし」

「ぐ ぐぐぐ」

「あたしはこうやって生きてるんだ。あんたみたいな、自分の力で生きてないやつとは違うんだよ、チンピラ！」

「こ、このアマ」

「さあ、どうするチンピラ？ このまま焼け死ぬかい？ それとも尻尾を巻いて帰るかい？ そのドン何ちゃらの所へさ」

「く、くそう」

男は、二、三步後ずさると、額を押さえ、後ろを向いて、一気にマーニャの前から逃げ去った。

「お、覚えてやがれっ！」

「やなこった〜」

マーニャが嬉しそうに手を振る。

男は、ディルの横を通り過ぎ その瞬間、じろりとディルを睨んだ。

ひどく歪んだ目だった。

「ガキ 覚えてやがれ」

男は、そう捨て台詞を吐くと

「てめえら！ いつまでも寝てんじゃねえ！」
床に転がっている手下二人を、乱暴に蹴った。

「んあ　？」

「あ、兄貴　？」

「おら、帰るぞ！」

すこぶる機嫌の悪い声で、男は言った。

「　？」

「へ、へい！」

何が起こったのかわからぬまま、手下二人は、足早に歩く金髪の男の後について行った。
彼らもまた、強い者には逆らえない人種に違いなかった。

*

一直線に、酒場の玄関に向かって歩く三人。

このまま酒場から出ようとして

足が止まった。

三人の顔が、引きつった。

いつの間に酒場に入ったのだろう、扉のそばに、一人の男が立っていた。

老人だった。

伸ばした白髪を後ろで結んだ、銀縁丸メガネの小柄な老人。

ダブルのスーツの上に、黒い革のトレンチコートを羽織っていた。

そんな老人が、床に立てた杖を両手で支えにして、立っていたのだ。

老人の姿を認めた金髪の男は、やっとのことで、喉の奥から、かすれた声を絞り出した。

「ド　ドン　」

「ふむ」

ドン、と呼ばれたその老人は、辺りを見回し、一言、答えた。

「な、なんでこんなところに　しかもお一人で　」
「わしだって、一人で酒を飲みたい時もあるわ」

沈黙の後、老人は言った。
メガネの奥の目が、鋭い光を放つ。

「全部、見とったよ。最初から最後までな」

「じゃ、じゃあ、話が早えや」
冷や汗を流しながら、わざとらしい笑顔で、男が言う。
「あの女を何とかして下さいよ、ドン！　ドンの名前を出しても全然ビビらなかった、
生意気なあの女を　」
「ほっほっほ　『何とかして下さいよ』かよ　」

そこまで言うと、老人は、息を思い切り吸い込み　突然、大声で怒鳴った！

「ぶわっかもーんっ！」

怒声が、店の壁を、天井を、ビリビリと揺らす。

「何が『何とかして下さいよ』じゃ！　わしの名前を勝手に持ち出して、^{カタギ}堅気のお嬢さんを泣かせた　それだけでも許しがたいというのに！」

この小柄な老人のどこから、こんな声が出るのか。
圧倒的な迫力に、三人の男たちは身動きひとつ出来なかった。

「いざ自分たちの手に負えない者が出てきたら、わしに泣きつく　しかも相手は若い
女とは！　恥を知れい！」

「　」

「分かるとるのか。お前らはわしの名を貶め、わしの顔に泥を塗り、^{ファミリー}組織の誇りすら
汚した　」

「ド、ドン　」

「わしが、組織の誇りを汚した者にどう対するか　知らんわけではあるまい？」

「ぐ　　ぐぐ　　」

「そこで待っておれ。反省しながらな」

言い捨てると、老人は、杖を右手でつきながら、ゆっくりと彼らの横を通りすぎ、ディールたちのテーブルの前までやってきた。

「お嬢さん方　　」

そして彼は、深々と頭を下げた。

「うちの若いもんが、ご迷惑をおかけした。この通りだ」

再び頭を上げる。

マーニャの眼光と、老人の眼光が、一瞬、ぶつかり合う。

「ってことは　　あんた、あのチンピラの親分さんかい？」

「そういうことになるな。わしの名はドン・ジョバンニ　　^{エンドール}この街を仕切らせてもらっておる」

「へえ　　」

マーニャの眼光が、一瞬緩んだ。

「あんたは本物だね、お爺ちゃん。あのチンピラとは目が違う　　でもね」

再び険しい目つき。

「部下の^{しつけ}躰がなっていないねえ。ああいう危ないのには、首に縄つけときなよ」

「まったく、お恥ずかしい、とはこの事じゃ。面目ない」

老人　　ドン・ジョバンニが、ばつの悪そうな苦笑を浮かべる。

「しかし、見事な啖呵じゃったのう、お姉さん」

マーニャに向かって、心底、嫌味のない口調で、ドンが言った。

「どうじゃ、うちで働いて見んか？ お姉さんも本物じゃて、きっとモノになるぞい」

「ギャングねえ　　それもいいかもね　　」

腕組みして、考え込むふりをするマーニャ。

「！」

「姉さん！」

ディルとマーニャが、思わず、声を出す

「な～んて」

マーニャが、ぺろりと舌を出す。

「残念だけど、あたしにはやる事があるからね。父さんの仇討ち、それに あの子を守らなきゃいけないから」

マーニャが、ほんのちょっと、ドンの横を見た。

その視線の先に、ディルがいた。

緑色の髪、涙目の華奢な少女。

抱きしめると折れてしまいそうな、すぐ壊れてしまいそうな、そんな少女 。

「ほう そうかいそうかい、そいつは残念じゃて」

ドンは愉快そうに笑うと、今度はディルに向き直り、言った。

「お嬢さん、あんたには一番迷惑を掛けたのう。この通りだ」

再び、頭を深々と下げる。

小柄な老人ながら、人の上に立つ者ならではの重みを感じさせる礼であった。

「あ、いや、その 」

戸惑うディルに、ドンは優しく言った。

「怖かったじゃろ？」

「えっ？」

「怖くて、何もできなかったじゃろ？」

「は、はい 」

ディルは、うつむいた。

あの恐怖が、再び思い出される。

「ほっほっほ そうじゃろうそうじゃろう。若い娘さんというのは、そういうもんじゃ」

ドンは、再び笑った。

「じゃがの、お嬢さん。それではいかんのじゃ」

「えっ？」

「確かに、怖くて動けなくなる。それは分かる。じゃが、それではいかん 怖くても、

動けるようにならなければいかんのじゃ」

「 」

「そうでなければ、一生、何もできんで終わってしまうぞい」

「おー、お爺ちゃん、いい事言うじゃん」

マーニャが、明るい顔で、ぱん、と一度手を叩いた。

そして、ディルの頭に手を置き、言った。

「このお爺ちゃんの言う通りだよ、ディル」

頭を撫でながら、続ける。

「いいかい　　どんなに怖くたって、イヤな物はイヤだって言わなきゃダメ。

　　そうしなきゃ、相手にも、他の人にも、分かってもらえないよ」

「　　」

「動かなきゃ、何も言わなきゃ、誰も助けてくれない。誰にも分かってもらえない」

実感がこもったマーニャの言葉。

ディルの背後で、ミネアも、うなずきながら、それを聞いていた。

「相手にやめて欲しければそう言う。分かって欲しければそう言う。誰かに助けて

　　欲しければ、そう言う　　そうしなきゃ、周りは何もしてくれない」

「　　」

「あんたが何を考えているのか、何をしたいのか。何をするために生きてるのが

　　分かって欲しいなら、助けて欲しいなら、それを周りの人に分かってもらえるように

　　しなきゃ、ダメなんだ　　」

マーニャが何を言っているのか、なんとなく、ディルにも分かるような気がした。

彼女が語っていることは、まぎれもなく、己の考えを前面に出し、己の力で光り輝く、彼女の生き方そのものだったのだ。

「あたしは、そうやって生きたい　　だからあたしは、自分の名前だけで、自分の力で

　　生きてるんだ。ミネアだってそうだ」

ミネアが、くすっ、と笑う。

「ディルも、そうやって生きてごらん。自分の気持ちを表しながら、生きていって

　　ごらん。そうすれば、みんなに分かってもらえるから」

マーニャが、ディルに顔を近づけ、その頬をそっと両手で挟む。

「出来るかい？」

「　　出来そうな気がします」

ディルは、にっこり笑って、うなずいた。

「よーし！ じゃあ、もうあんなチンピラが来ても、大丈夫だね！」

「えっ ？」

「あいつらにも、『イヤな物はイヤだ！』って言えれば どれぐらいイヤなのか
思い知らせてやれば、あんなやつ、泣いて帰っちゃうよ さっきみたいにさ。
何とかなりそうでしょ？」

ディルは、先ほどの三人の顔を思い出した。

「それは ？」

少しうつむいて しかし、顔を上げて、ディルは答えた。

「大丈夫です！ ちょっと、怖いけど でも、マーニャさんが大丈夫って言って
くれるなら、大丈夫です！」

マーニャが、嬉しそうに笑った。

「そう、その意気！ あんなチンピラなんか、チョチョイのチョイでやっつけちゃえ！」

「はいっ！」

*

「お前さん マーニャさんと言いなさるのか」

ドン・ジョバンニが、突然口を開いた。

「そう。あたしはコーミズのマーニャ。しがない踊り子さ」

「コーミズ 踊り子 やはり ？」

腕を組んで考え込むドンを不審に思い、マーニャが声をかける。

「ちょっとお爺ちゃん、どうしちゃったのさ？」

「人違いなら申し訳無いが お前さん、1年ぐらい前に、モンバーバラの劇場で
踊っておらんかったかね？」

「1年前？」

いぶかしげに、マーニャは言った。

「ああ、その頃なら、確かにあたしはモンバーバラにいたよ。＜モンバーバラ劇場＞で
踊ってた。 でも、なんでそんな事聞くの？」

「やはり、そうじゃったか どこかで見たことのある娘さんじゃと思ったわい」

「？」

「わしはな、1年前、お前さんの舞踏を見たんじゃよ。モンバーバラでな」

「へえ！」

「少々、向こうの大陸ともめておってな　その火を消しに行っとったのじゃ。
話し合いに次ぐ話し合い　向こうもその筋の人間じゃから、一筋縄じゃいかん。
そんなこんなで疲れておった時に、劇場でお前さんの^{ダンス}舞踏を見たんじゃよ」

遠い目をしながら、ドンは語り続けた。

「正直、わしは驚いた　あそこまで激しく、熱く、楽しい^{ダンス}舞踏を舞える者がこの世におるとは思わなんだ」

「そりゃそうさ。あたしの^{ダンス}舞踏はあたしにしか踊れない　あたしの全てが、あたしの^{ダンス}舞踏だからね」

「あの^{ダンス}舞踏のおかげで、わしは次の日への活力を得る事ができた　そして次の日、向こうさんとめでたく話し合いがついた、というわけじゃ。お前さんのおかげじゃよ」

「ははは、そう改まって言われると、照れるじゃない」

マーニャは頭を掻きながら答える。

「おう、そうだ。お前さんがあの時の^{ダンサー}踊り子なら　ひとつ、頼みを聞いてくれんか」
突然、ドンが切り出した。

「マーニャさん。わしらが迷惑をおかけして、さらにこんなことを頼むのは厚かましい
と思ひなるかも知れんが

このドン・ジョバンニに、あの^{ダンス}舞踏を、もう一度見せてくださらんか」

「えっ!？」

さしものマーニャも、一瞬驚きの表情を浮かべた。が、それはすぐに、ちょっと意地悪な微笑みに変わった。

「面白いこと言うお爺ちゃんだねえ　。いいよ、踊ったげる。多分ディルも、見れば『分かってくれる』と思うしね」

「おお、そうかそうか、踊ってくれるか！」

「ただーし！」

マーニャが、右手を出し、したり顔で言う。

「あたしもプロの端くれだ。もらうもんはもらうよ」

「!？」

一瞬、猫だましを食らったような顔をしたドンは、次の瞬間、大爆笑した。

「わーっはっはっはっは！」

「？」

「さすが、うちの若いのにあれだけの啖呵を切るだけはある。このドン・ジョバンニに面と向かって『もらうもんはもらう』と言ってのけたのは、お前さんが久しぶりじゃ」
「あたしは『言いたいことは言う』って言ったでしょ。お爺ちゃん」
「そうじゃったな、ほっほっほ お前さんの言う通りじゃ。プロには報酬が無いとな」

そう言うと、ドンはポケットから紙束とペンを取り出し、紙束の1枚を破くと、何やら字を書き出した。

「この小切手を持って、町外れの事務所に来なされ。そこに書いてある額を払おう」

「はい、どうも っ！ お爺ちゃん！何なのよこの10000ゴールドって！」
額面の、あまりの巨額さを見て驚くマーニャ。

「ん？ 少ないかね？」

「何言ってるのよ！ 一回踊るだけで10000ゴールドなんて そりゃあ、もらえりゃ嬉しいけど いくらなんでも、これは買いかぶり過ぎじゃない？」

「いいや、そんなことはないぞい。お前さんのダンスは10000ゴールドじゃ。わしが保証する」

「ふふっ ありがとう、お爺ちゃん」

マーニャは、まるで彼女の妹のような優しい微笑みを浮かべ、言った。

「なあに、この愚か者どもにも、考える機会を 」

と、背後で待たせてあるはずのチンピラ三人組の方を見やったドンだったが

「あやつら どこへ行きおった？」

「ああ、さっき、逃げたよ」

「逃げた？」

困り顔で、マーニャが答えた。

「叱られると思ったんじゃない？ 抜き足差し足忍び足で出てったけど

ねえお爺ちゃん、悪いこと言わないからさ、あいつらクビにしちゃえば？」

「ほっほっほ あやつらを雇ったのはわしじゃ。わしのケツはわしが拭くわい」

「お爺ちゃん、あんたは本当に本物だよ。あと50歳若けりゃ惚れてたかもね」

「今からでも遅くはなからう？ ほっほっほ」

「やめとくよ、遺産目当てだと思われるのはシャクだからさ」

そんな他愛ない会話を挟み、マーニャはドンに言った。

「じゃあ、観客は、ディルとマスター　ほら、カウンターの奥で小ちゃくなって
ないで　そんだけだね」

「いや、まだおる」

と言うと、ドンは、つつつつと、と玄関に歩いてゆき　扉を開けた。
すると

「うわっ！」

扉の前には、数十人の老若男女が、聞き耳を立てるように、集まっていたのである！

「な、なにっ？」

「どうも、わしがさっき、怒鳴った声が、少々大き過ぎたようじゃ。おかげで、
野次馬が集まってきたようじゃの」

扉の前で、引きつった笑いを浮かべる野次馬たち。

「どうすんのよ？」

「袖触り合うも多生の縁、彼らにも見せてあげたらどうじゃ。見料はさっきの小切手に
込みということだな」

「　わかったわ」

「ご主人も、よろしいな」

今までカウンターに隠れていた主人が、カウンターから顔を出し、うなずく。

「だそうじゃ。ほれ、入ってきなされ」

ドン・ジョバンニに促され、扉の外で聞き耳を立てていた野次馬たちが、ぞろぞろと中
に入ってくる。

椅子に座り、その椅子も足りなくなり　またたく間に、彼女達のテーブルを取り囲む
ように、酒場は人でいっぱいになった。

「超満員ね、姉さん」

ミネアが嬉しそうに言う。

「久々だ、腕が鳴るねえ　ミネア、あんたにも手伝ってもらうよ」

「もちろんよ」

「えっ？ 手伝う、って」

ディルがミネアに聞いた。

「ふふ、それは見てのお楽しみ　ところで姉さん、あれは持ってきたでしょうね？」

「その辺は抜かりないって」

言うと、マーニャは、先程まで自分が座っていたテーブルの下に手を入れ、置いてあった小さな提げ鞆ポーチを手にとった。

ここに来る時に、彼女が持っていたものだ。テーブルの下に置いたまま階段を降りそのおかげで、ディルにからんできた三人組の目には留まらなかったのである。

その提げ鞆ポーチを開け　マーニャは、中から、小さな円盤のような物を、2つ取り出した。それは、外見の通り、木でできた小さな円盤を2つ、糸でくくり合わせたような構造になっていた。

慣れた手つきで、マーニャはその糸の輪に、両手の中指を通す。

「それは　？」

「カスタンニエラ　ダンサー　鳴子。踊り子の必需品さ」

そう言うと、マーニャは、両手のそれを、指と掌の間で弾くように鳴らす。

かららっ、かららっ、と、乾いた音がした。

(あ　)

その音を聞いただけで、ディルの心臓が、どきっ、と鳴った。

ディルは、隣りにいる、ドン・ジョバンニを見やる。

「ふふふ　これじゃよこれ　この緊張感　」

嬉しそうに、彼は呟いていた。

カウンターでは、ミネアが、マスター主人と、何やら話をしていた。

マスター主人は、ミネアの話にうなずくと、奥に引っ込み　やがて、何か大きな、平たい箱のような物を抱えて、再び現われた。

ミネアは、それを受けとると、テーブルの上に置き、蓋を開いた。

中から彼女が取り出したものは、ディルの見たことのない、妙な物体であった。

まん中に穴の開いた、大きくて平たい洋梨のような形をした木の箱のようなものから、同じく木で出来た細長い板のようなものが伸びている。

そして、その細い板の上に、弦のようなものが6本、張ってあった。

「ギター　洋琴が、そんなに珍しい？」

ディルの視線に気がついたのか、ミネアが微笑んで言った。

「あ、初めて見たから」

「そうなの　これは楽器の一種なの。こうして」

ポロン

ミネアは、椅子に腰かけると、それを組んだ膝の上に乗せ、左手の指で器用に弦を押さえながら、右手で木の箱の穴のところの弦を、上から下へと優しく鳴らした。

「音を出すんだけど　ん～、ちょっと^{チューニング}調律が狂ってるわね」

言うと、ミネアは、一本一本弦をつまびきながら、板の先に付いているネジのような物を締めたり緩めたり　それによって、音の高さも、微妙に高く低く、変わってゆく。

(　)

また、ディルの心臓が大きく鼓動した。

「うん、これでいいわ」

うなずくと、マーニャの方を向き、右手の親指と人差し指で丸を作った。

オーケーのサインだ。

「よし、向こうも準備オーケー、と」

言うと、マーニャは、テーブルから、客の方に近づくように何歩か歩いた。

「あー、もうちょっと下がって。この辺危ないから」

客は、言われるままに後ろに下がる。

こうして、マーニャの周りに、ぽっかりと誰もいない空間が出来た。

そう、彼女の舞台が。

*

「いいかいディル、きちんと見ておいで　あたしの全てを。あたしの中に燃える炎を」

「は、はい！」

舞台から、マーニャはディルに言った。

「じゃあ、行くよ」

言うと、マーニャは、体全体をの力をすっと抜いたように、両腕を下げ、うつむいた。

場に、不思議な緊張感が満ちる。

空気が圧縮され、固体になったような感触。

(なに、これ 息が苦しい ?)

ディルは、いまだかつて味わったことのない感覚に呑み込まれていた。

他の観客も同じようだ。

息を飲む音、咳をする音すら聞こえない。

真の静寂の中、無数の視線が、まるで美しい彫像のように動かない、その踊り子^{ダンサー}を見つめていた。

やがて、静寂を破るように、ミネアが、洋琴^{ギターラ}の胴を右手で、こっ、こっ、と叩き始めた。
こっ こっ こっこっこっ、

こっ。

それが合図だった。

★

その一瞬！

ミネアの洋琴^{ギターラ}とマーニャの「鳴子」^{カスタニョエラ}が同時に鳴った、その一瞬！

極限まで圧縮された空気が、一気に爆発した！

ミネアの指が紡ぐ、8分の6拍子の歯切れの良いリズム。

愁いを帯びた洋琴^{ギターラ}のメロディーと、「鳴子」^{カスタニョエラ}の乾いた打音に乗せ

マーニャが舞い、跳び、回る！

なめらかな指先！ 伸びやかなつま先！ なびく長い髪！

マーニャが笑い、悲しみ、怒る！

炎のように、激しく、熱く、明るく！

圧倒される観客たち！

ディルも、ドン・ジョバンニも、そして他の多くの客も 呼吸すら忘れ、ただひたすらに、マーニャの姿を目で追っていた。

ダンス
舞踏は続く。

目を閉じて、時に首を傾げながら、板の上でせわしなく手を動かし、音を紡ぐミネア。彼女の演奏にも、自然と熱が入る。

ミネアの感情を受け止め、マーニャの舞いも一段と激しさを増す。

酒場の天井に吊るされたランプの炎が、揺れながら、マーニャの顔を赤く照らす。頭の動きにつれて流れる長い髪から、光の玉のように、汗の滴が飛び散る。

燃えていた。

輝いていた。

その輝きは、彼女の人生の輝きだった。

ディルは、我知らず、涙を流している自分に気付いた。

(あれが マーニャさん)

その時、ディルは気がつかなかったが、ディルの他にも、泣いている客がいた。

そこにいる誰もが皆、理解していた。

それを口に出して理路整然と言えるものはいなかったかも知れないが、理解していた。

これが この踊り子が今表現している全てが、なにひとつ偽りのない、彼女の人生であるということ。

ディルは、先刻のマーニャの言葉を思い出していた。

『あんたが何を考えているのか、何をしたいのか。何をするために生きてるのか
分かって欲しいなら、助けて欲しいなら、それを周りの人に分かってもらえるように
しなきゃ、ダメなんだ 』

『あたしは、そうやって生きたい だからあたしは、自分の名前だけで、自分の力で
生きてるんだ』

『ディルも、そうやって生きてごらん。自分の気持ちを表しながら、生きていってごらん。そうすれば、みんなに分かってもらえるから』

(マーニャさん、本当に、ああやって生きてるんだ)
ディルは、今、心の底から、マーニャを理解できた、と思った。
(私も マーニャさんみたいに、生きたい)

今、小さな火が、ディルの中に灯ったのだ。
これから大きく燃える炎となるべき、小さな火が 。

*

ダンスも、フィナーレに近づいていた。

ミネアの^{ギター}洋琴が、ひとつのフレーズを繰り返して奏で始める。
タタタタ、タタタタ、タタタタ
小さく、やがて大きく。

それに合わせ、マーニャの動きも、小さく、少しずつ、大きくなっていく。

観客も皆、^{ダンス}舞踏が終わりに近づいていることを予感していた。
そして、だからこそ、最後の瞬間まで彼女の姿を見逃すまいと、じっと、ただひたすらに、彼女に視線を注いでいた。

タタタタ、タタタタ、タタタタ

単調なリズムを刻んでいたミネアの 紡ぐフレーズが変わる。

高音から低音まで、速いパッセージを弾き下ろし

タタタタ、タン！

^{ギター}洋琴の最後の音。
^{カステニューエラ}鳴子の最後の一言。
そして

「オー・レイっ！」

姉妹が、完璧に同じタイミングで、叫んだ。

マーニャは、天を仰ぎ、右手を、何かをつかむように高く差し上げ
ミネアは、最後の和音を弾き終わった態勢のまま

動かなかった。

誰も、何も言わない。
完全な静寂。

そして、その数瞬後。
エンドール最大の酒場に、地を揺るがすような、万雷の拍手が巻き起こった。

*

拍手と歓声の中、マーニャが、ミネアの方にすたすたと歩き始めた。
息を弾ませ、汗だくで、ミネアに微笑みかけ 右手を上げる。

それに答え、ミネアも、^{ピアノ}洋琴をテーブルに置き、にっこりと微笑み、右手を上げた。
ミネアの額にも、汗が光っていた。

ぱぁん！

お互いの右手が、頭上でぶつかり、打ち鳴らされる。
互いの信頼に、互いが応えた それを称え、感謝する、ちょっとした儀式だった。

マーニャは、その後、今度は小走りで、ディルのところに走ってきた。

涙を流しているディルに、マーニャはまた、いつかのように、顔を近づけた。

上気した顔、弾む息、光る汗
ディルにとって、その全てが、マーニャが活着ている証だった。

マーニャは、にっこりと人懐っこい笑顔を浮かべ、そして、言った。

「見えたかい？ あたしの中の炎」

「見えた 見えました 」

ディルは、やっとのことで、そう答えた。

「そう 分かってくれたんだね、ディルは」

「私、マーニャさんみたいになりたい マーニャさんみたいに 」

マーニャは、泣きじゃくるディルを、ぎゅっと抱きしめた。

そのまま、右手で、頭をくしゃくしゃと撫でる。

「なれるさ。あたしみたいに、いや、あたしなんかより、ず~っとず~っといい女に。

大丈夫、あたしが太鼓判押し上げるよ」

「変わっておらなんだな 1年前と全然変わっておらなんだ」

その横で、エンドール最強の^{ゴッドファーザー}大親分も、やはり、涙を流していた。

「いいもんを見せてもらうた これで冥土の土産が出来たわい」

「縁起でもないね、お爺ちゃん せっかくあたしの踊りを見たんだ、長生きして
もらわなきゃ」

マーニャが、ドンにウインクした。

「それに、お爺ちゃんには、お爺ちゃんにしか出来ないことがまだあるでしょ？

早死にしちゃってどうすんの」

「ほっほっほ、そうじゃったの それじゃ、そのひとつを、さっそく片づけると
するか」

言うと、ドンは、すたすとカウンターに歩いて行った。

^{マスター}主人と、ごによごによと、何やら話し合う。

話し合いはすぐに終わり、またマーニャの前に戻ってくると、ドンはくるっと回れ右を
して、大勢の客に向かって言った。

「お集まりの紳士淑女諸君！ この偉大なる踊り子に、我々が今日巡り合い、その
全てを見ることが出来た、その幸運を、わしと諸君が共に喜び祝うため、本日は
そこで、少し勿体を付けてから、彼は大声で言った。」

「この酒場はわしが借り切った！ 酒代も^{ファミリー}一家が全て持つ！ 一緒に騒ごうぞ！」

喜びの拍手と歓声が、再び、夜の酒場を満たした。

*

「許さねえ」

闇の中から、男の声が聞こえる。

「あの女さえ、助けに来なかったら 今ごろは」

「兄貴」

「どうするんで？」

「知れたことよ！ あの女と いや、あの女はやめよう あのガキだ。あのガキに
この火傷の恨み、たっぷりと思い知らせてやる へへへへへ」

(つづく)

<次回予告>

マーニヤの魂に触れたディル。
しかし、物語はまだ終わらない！

あの最強最悪の三人組の復讐^{リヴェンジ}が始まった！
マーニヤ戦闘不能！ 絶体絶命のピンチに、吹き抜ける一陣の風！
そして ついに、勇者の魂が目覚める時が来た！

「私の中の炎」最終話 「イヤな物はイヤなの！」

見よ！ これが<勇者>の闘いだ！
